

茨城県行方郡北浦村

菖蒲沢遺跡
調査報告書

1991年11月

菖蒲沢遺跡調査会

序

私たちの郷土は、緑豊かな自然と古くからの人々の生活の場となり、そこに幾多の歴史が残されております。こうした多くの歴史的遺産を保存し、調査を進めることによって先人たちの残した知恵や教訓を将来の村づくりに生かして行くことは、私たちの大切な責務と言えるでしょう。

この度、塙本建設株式会社による土砂採取工事のため、菖蒲沢遺跡の発掘調査が同会社の調査費全額負担により実施され、そしてその記録を保存することにいたしました。

今回、汀安衛氏を調査主任として作業を進め、幾多の重要な遺物遺構を発掘し、その当時の生活の片鱗をうかがうことができました。

ここに報告書の刊行をみることができたのは、全面的なご理解とご指導をいたしました指揮機関並びに関係各位のご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

この報告書によって、祖先の偉業の一部でもしあぶことができれば幸いかと存じます。また、文化財に対する認識と愛護の精神をさらに深められ、郷土を愛する心を培うえで貴重な資料かと思います。

是非、この報告書をご活用されますことを、心より期待申し上げごあいさついたします。

平成3年11月

北浦村教育委員会

教育長 阿須間 傑夫

例　　言

1. 本書は、茨城県行方郡北浦村大字行戸字菖蒲沢332-2番地に所在する菖蒲沢遺跡の土砂採取に先行する埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査は、鹿行文化研究所の汀安衛が担当し、平成3年5月13日から6月12日までの1ヶ月間行った。
3. 整理作業は、遺物復元、実測、トレース、版組、原稿執筆は汀安衛が主体的に行った。写真撮影をはじめ9月10日すべての作業を終了した。
4. 調査にあたり玉造町の塚本建設㈱に御協力をいただいた。
5. 遺跡は、土砂採取に先行する確認調査で発見されたものである。
6. 報告書の図面は、原則として1/30, 1/40, 1/60, 1/80としたがそれぞれ図中に表示した。写真図版の縮尺は不統一である。水系レベルは図中に表示した。遺物の縮尺は原則として1/3とした。
7. 報告書で使用したスクリーントンは、焼土、竈袖、火床部である。



火床部



カマド袖



焼土

記述方法について

- 壁面は、直立のものは垂直、やや開くものは鋭角、開くものは開いて、と表現した。
- 竈は、外部の掘り方、袖部形態でU字状、半円形、円形状と表現した。
- 土層は、新版標準土色帳（1987）を使用した。（主に2.5YR. 5YR. 7.5YR. 10YR.）
- 覆土は、ゆるく流れ込み状のものはレンズ状とし、各層が入り乱れているものは投げ込み的、状と表現した。
- 遺物は口縁部形態を説明し、須恵器と杯は、輪横み及び粘土組巻上げを器表面、断面等の観察から回転ミズビキ、ロクロ水引きの二種類に分類した。
- 回転は底部に残っている状態を示した。土製品は、径、長さ、重さ等を便宜的に使用し表中に示した。器形等不明確なものは独自の判断で寸法を表示した。（たとえば丸底に近い杯の底部）
- 遺構は、隅部の状態で丸く、鋭角、丸味をもつ等と表現した。これは総体的に見ての場合を基準とした。
- 遺構プランは東西、南北で50～60cm以下の違いの場合は方形プランと表現した。
- 土坑はすべて坑と表現した。
- その他、独自の判断等で表現したものもある。

目 次

序	
例言	
記述方法について	
I 調査に至る経緯	1
II 歴史的環境	2
III 調査日誌	4
IV 調査の概要	5
1 住居跡	5
第1号住居跡	6
第2号住居跡	7
第3号住居跡	9
第4号住居跡	10
2 土坑	14
第1号土坑	14
第2号土坑	14
第3号土坑	16
第4号土坑	17
第5号土坑	17
第6号土坑	17
第7号土坑	19
3 炉穴	21
第1号炉穴	21
第2号炉穴	21
第3号炉穴	21
第4号炉穴	21
第5号炉穴	23
4 建物遺構	23
5 グリット出土土器	25
V 総括	27

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	3
第2図	遺構位置図	5
第3図	1号住居跡、竈実測図	6
第4図	2号住居跡、竈実測図	8
第5図	3号住居跡実測図	9
第6図	4号住居跡、竈実測図	11
第7図	1. 2. 4号住居跡出土 遺物実測図	12
第8図	1. 3号土坑実測図	15
第9図	2. 4号土坑実測図	16
第10図	5. 6号土坑実測図	17
第11図	7号土坑実測図	19
第12図	1. 2. 3. 4. 5. 6. 7号土坑出土遺物拓影図	20
第13図	1. 2. 3. 4. 5号炉穴 実測図	22
第14図	建物遺構と土層図	24
第15図	建物遺構実測図	25
第16図	グリット出土遺物拓影図	26

図版目次

図版1	遺跡遠景、遺構とプラン
図版2	調査区南側遺構検出状態、建物跡 と2号住
図版3	1号住遺物出土状態、同竈、同完 掘、遺物出土状態、同
図版4	2号住遺物出土状態、同竈、同完 掘、同上層上部はジギョウ跡
図版5	3号住完掘、4号住遺物出土状態、 同完掘、同竈、同遺物出土状態
図版6	1号土坑土層、2号土坑遺物出土 状態
図版7	3号土坑完掘、同上層と遺物
図版8	4号土坑完掘、5号土坑完掘
図版9	6号土坑完掘、7号土坑完掘
図版10	1号炉穴完掘、2号炉穴完掘、3 号炉穴完掘、4号炉穴完掘、5号 炉穴完掘、建物遺構上手廻い、 同南側から、同北側上手土層
図版11	西側土手土層、同通路土層
図版12	建物遺構完掘、建物遺構と2号住 居跡
図版13	1住、2住、4住、1~7号土坑 出土遺物と寛永通宝

I. 調査に至る経緯

年月日	内 容	備 考
3年2月13日	塙本建設株式会社より行戸地内の面積8.41m ² について 土採取事業届出書が提出される。	(玉造町)
2月19日	現地確認踏査(土器片散布確認)	教委
3月7日	埋蔵文化財有無の照会	
3月14~17日	現地確認調査(トレンチ方式)	教委
3月22日	埋蔵文化財有無の回答。その取り扱いに関する協議 (新発見)	塙本建設KK 教委
3月25日	文化財保護審議会に報告並びに協議	審議会開催
4月1日	菖蒲沢遺跡発見の届出を県文化課、文化庁へ提出	県、文化庁
4月2日	菖蒲沢遺跡発掘調査見積書を塙本建設㈱へ提出	
4月10日	埋蔵文化財発掘調査の届出を提出	県、文化庁
5月7日	菖蒲沢遺跡発掘調査会発足会議	役場
5月13日 6月12日	遺跡発掘調査作業	
6月24日	整理作業、報告書作成作業に入る	鹿文研

II. 歴史的環境

本遺跡は、茨城県行方郡北浦村大字行方字菖蒲沢332-2番地に所在し面積2 h m²前後の広がりをもつと思われる標高34m程の山田川によって開拓された谷津に突き出す半島状台地に所在する。(第1図)

北浦村は、茨城県の東南部に位置し南に麻生町、西に玉造町、北側は鹿島郡の鉢田町に境をそれぞれ接し東側は“北浦”に面し人口11,100余人の農業を基幹産業とする村である。全国的に有名な北浦みつばを始め、たばこ、蓮、椎茸、しその葉等は代表的な作物であり豊かな緑の残る農村地帯である。しかしこうした豊かな自然環境も各種の開発や上砂採取などにより儲かづつであるが消えつつあり、これと共に埋蔵文化財も記録保存の名の下に同様である。

地勢は、東側に北浦湖に面しこれにむかって山田川、武田川がながれ、こうした小河川によって開拓された沖積地が複雑に入り込む。大地は標高30~34m前後を測り遺跡は、こうした河川によって開拓された台地縁辺に占地し古代から多くの先人の足跡が残されている。

縄文時代の遺跡は、中期から後期にかけての鬼越貝塚、中期前半の今山貝塚、前期後半の鶴貝貝塚、後期主体の成田貝塚、中期、後期の長野江貝塚等が見られいずれも北浦側から500m前後の距離に位

置し、台地平坦部、斜面部に貝殻が露呈している。早期の遺跡は少なく遺物は、各遺跡に散在して認められるが目立った遺跡は確認できない。今回調査した菖蒲沢遺跡は、前期前半の遺構が検出された唯一の遺跡である。その他今山、六台遺跡では阿玉台式、加曾利E式などの住居跡が検出されている。^{注1}また旧石器時代の遺物は10点ほど出土している。^{注2}

弥生時代の遺跡は、少なく北高岡地区にまとまった遺物の出土を見る。各遺跡の中に散見しているにすぎない。菖蒲沢遺跡でも5片が検出されている。今後の調査によって集落跡が確認されるであろう。

古墳時代の遺跡は、村内ほぼ全体に粗密はあるが分布し20ヶ所が知られ多くは細文時代の遺跡と混在している。調査された山田地区の一帯の遺跡では総数400軒程の古墳時代後半から奈良、平安時代の住居跡が検出されている。

この時代の墳墓、古墳も総数100基程確認されている。とくに山田川右岸の中流域に集中して認められる。多くは後期の古墳が主体を占め埋葬施設は箱式石棺である。これらから沖積地、水田が生活の拠点として発達してきたと推定されよう。

鎌倉時代から戦国時代にかけては山田川域の山田氏、武田川域の武田氏の勢力に二分され中小の屋形、館、城郭へと変化している。これらに属しない勢力もわずかに認められ多くの屋形、城跡が今日に残されている。

江戸時代は旗本領、麻生藩領等が混在しているが多くは旗本領である。一時佐竹、仁賀保、皆川氏等の支配等があり初期は混乱気味である。

明治時代は大字単位の村から津瀬、要、武田の3村が生れ、昭和34年町村合併により新しい北浦村が誕生し今日に至っている。

※註1 今山遺跡調査報告書 遺跡調査会 1990年

註2 六台遺跡調査報告書 遺跡調査会 1990年



茨城県 北浦村

1:50,000

平成2年10月

北浦村役場
茨城県行方郡北浦村田中564
〒311-17 電話029-57111
郵便番号311-0211



第1図 遺跡位置図

III. 調査日誌

調査は、平成3年5月13日より6月12日までの一ヶ月間実施した。以下日誌から調査経過の概要を述べる。なほ表土は調査前に削平され地形測量を実施できなかった。

- 5月13日 道具運搬、テント設営、遺構確認の為表土層除去。
- 5月14日 前日に続き遺構確認、確認部から石灰でマーキング。
- 5月15日 前日同様遺構プラン確認、ほぼ終了。
- 5月17日 1号住居跡から調査を開始する。遺物からは古墳時代末か。
- 5月20日 前日に続き1号住査、竈北壁にもつ、鉄族出土、繩文土器多い。
- 5月21日 3号住査開始、1号住上層ベルト除去、4号住査開始。
- 5月22日 3号住査ほぼ、4号住竈北壁に確認される。1号住遺物平面図作成。
- 5月23日 1号住遺物あげ、3号住ベルト除去。4号住ベルト除去開始。
- 5月24日 4号ベルト除去終了。遺物平面図作成、遺物取り上げ。遺物からは平安時代?。須恵器蓋、台付皿出土。1号土坑調査開始。
- 5月25日 2. 3. 4号土坑調査開始。いずれも1/2づつ。
- 5月28日 1. 2. 3号土坑土層図作成、1号土坑1/2調査開始。1号住竈調査。
- 5月29日 1号住平面図、写真すべて終了。2号土坑実測。3号土坑1/2調査、4号1/2調査。5号土坑調査開始。1号を除き落し穴状態。
- 5月30日 2号住査開始する。繩文か…。4. 5号土坑調査。
- 5月31日 3. 4. 5号土坑平面図、写真すべて終了。降雨の為3.40分で作業終了。土居の巡る建物跡の測量。寺小屋跡といわれる。
- 6月1日 2号住査、しかし遺構にならず。炉穴4基確認。6.7号土坑調査開始。
- 6月3日 遺構確認の為30cm幅でサブトレチを3本入れる。遺構確認出来ず。寺小屋跡と言われる土居の巡る中の遺構確認。
- 6月4日 1. 2. 3. 4. 5号炉穴の調査、いずれも繩文か…?。7号土坑調査。
- 6月5日 建物遺構の調査、土台跡? 2ヶ所検出。住居跡1軒確認。通路跡確認。炉穴の実測すべて終了。
- 6月6日 十居の十層図作成準備。木株除去。6号土坑平面図作成。
- 6月7日 7号土坑平面図作成。建物跡調査。寛永通宝出土。土間状部分検出。
- 6月8日 土台石は検出出来ず。20ヶ所程のローム層の固い部分が認められ、いずれも建物のジギウ跡か。図面、写真作成。2号住の調査開始。
- 6月10日 2号住査、土層図作成、北側に竈をもつ。遺物やや多い。
- 6月11日 土層ベルト除去、竈調査。遺物平面図作成。

6月12日 人手多い為一部遺物の水洗い、2号住平面図作成。写真撮影。本日をもって現場の作業はすべて終了した。

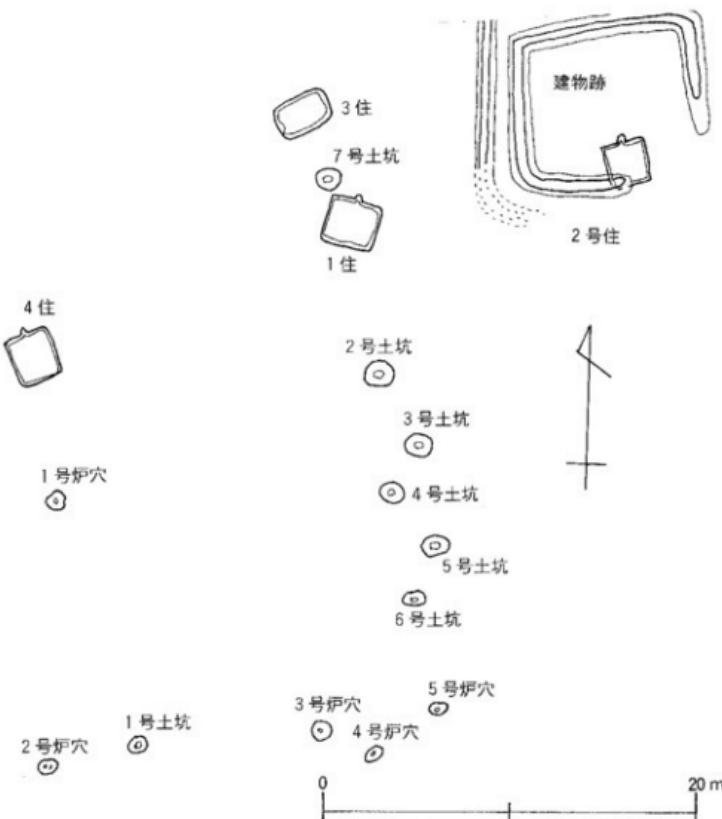
作業終了の為、全員で簡単な打ち上げの席を設け結果の報告、反省、懇親を深めた。

6月後半から整理に入り9月18日で整理作業は終了した。

IV. 調査の概要

本調査は、5月13日から6月12日までの一ヶ月間、都合24日実施した。その結果4軒の住居跡と土坑7基、建物跡遺構1棟が検出されました。調査対象面積は30aでその一割程はなだらかな傾斜面を呈し残りはほぼ平坦部で台地側に続いている。

遺構は全面に散在して検出され特別な偏在は示していないが先端部に炉穴、次に土坑、住居跡と続く建物跡は江戸時代後半から明治期にかけてのものと伝承されていたが時期は確定できない。いずれも山林中の為遺存状態は良好であったが遺物は少なくテン翁2個分であった。以下各遺構の特徴、遺物について住居跡、土坑、炉穴、建物の順に述べる。(第2図)

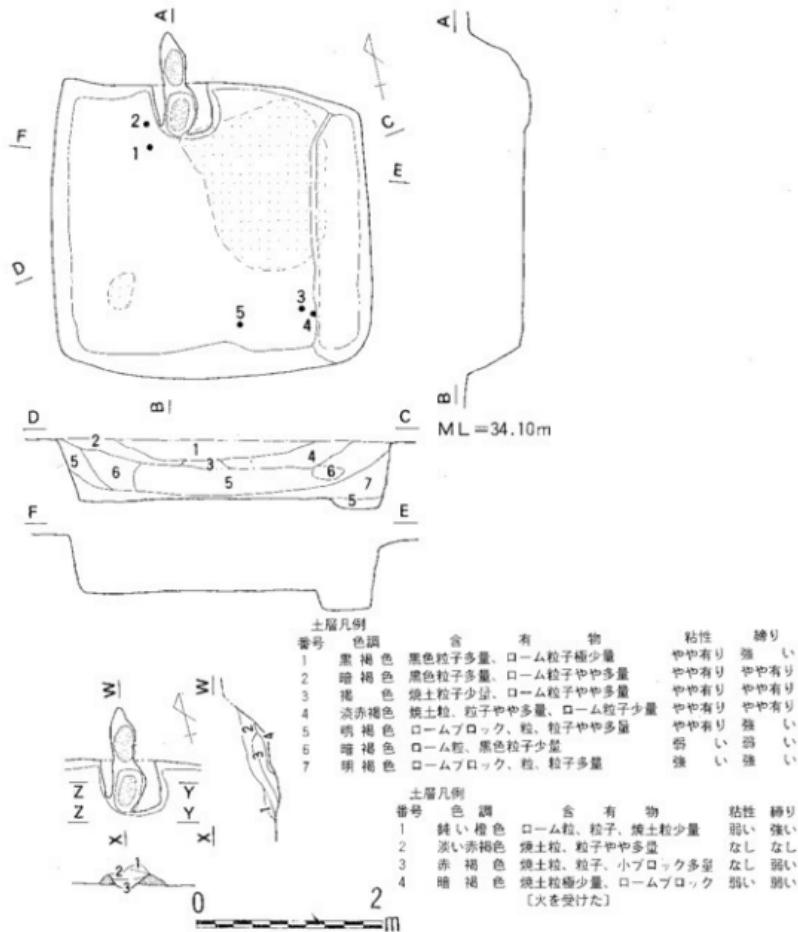


第2図 遺構位置図

1 住居跡

第1号住居跡〔第3図、第7図〕

本住居跡は、調査区のやや西よりの中央部に位置し切り合ひ関係ではなく単独で検出された。西側3mには3号住居跡が位置し台地の平坦部に確認された。遺存状態は、良い。主軸をN-10°-Eに置



第3図 1号住居実測図

き東西3m、南北34m、隅部のやや丸みをもつ方形プランを呈している。壁面はややだれ気味、深さは60~79cmを測る。床面は竈の全面ではやや縦まりをもつが壁面、周辺部は弱い。柱穴は検出されず周辺部からも認められなかった。周溝は認められない。床面はほぼ平坦に移行しているが東側にベット状の20cm程の凹みが見られた。

竈は、北壁中央部やや西側寄りに位置し検出された。袖部は右側で60cm、左側で40cmと右側の袖が包むように見られ外部へはV字状に掘り込んでいる。火床部は前面部、煙道部の2ヶ所に認められた。用材は砂質のやや多い灰褐色の粘土を用いていた。

覆土は、7層に分けられレンズ状の自然堆積を示していた。中央部に黒褐色、暗褐色層がみられ下部に向かってロームブロック、粒、粒子が多量に含み明るさを増す。4層は焼土の投げ込み層である。全体的に縦まり、粘性はややある。

遺物は、全体的に少なくいずれも少破片で図示出来たものは土師器杯2、鉄鎌3である。遺構の東側に見られる杯は床直、鎌は10cm程床面から浮いていた。杯形態からは鬼高窓後半の遺構と推察される。

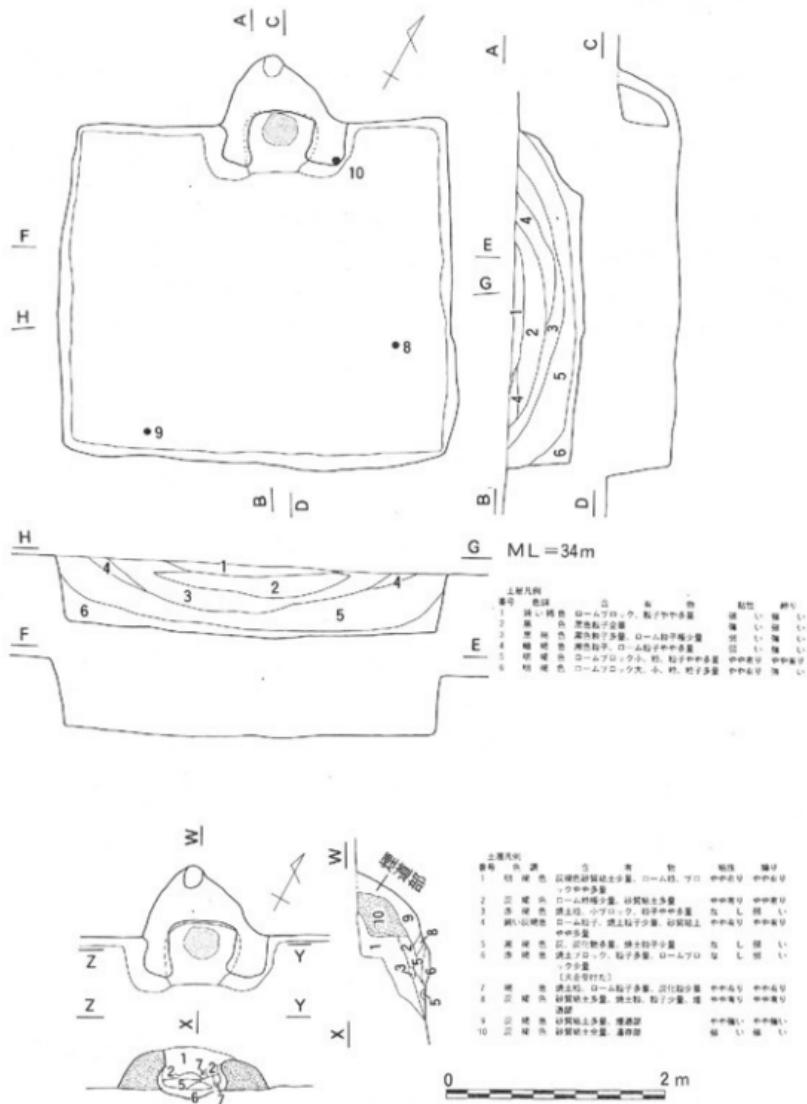
第2号住居跡〔第4図、第7図〕

本住居跡は、調査区の中央部北側に位置し上部に建物基礎跡1層が見られた。住居跡との切り合ひ関係はなく単独で検出された。1号住居跡の北側20mに位置し、台地の平坦部に確認された。遺存状態は良い。主軸をN-30°-Wに置き東西3.6m、南北3m、隅部の鋭角な長方形プランを呈している。壁面は僅かにだれ気味、深さは60~70cmを測る。床面は竈の前面では縦まりをもち壁面、周辺部はやや弱い。柱穴は検出されず周辺部からも認められなかった。周溝は認められない。床面は中央部がやや低いがほぼ平坦に移行している。

竈は、北壁中央に位置し検出された。袖部は左右とも50cm、逆への字状に伸び外部へはハ字状に掘り込んでいる。火床部はやや奥部に位置し、煙道部の天井は遺存し砂質粘土、ローム層は赤く火を受けている。用材は砂質のやや多い灰褐色の粘土を用いていた。

覆土は、6層に分けられ各層ともきれいなレンズ状の自然堆積を示していた。中央部の1層は鈍い褐色で縦まりは強く上部に存在した建物基礎部にあたる。他は住居跡覆土上で2層黒色、3層黒褐色、4層暗褐色層と下部に向かってロームブロック、粒、粒子を多量に含み明るさを増す。全体的に縦まり、粘性はややある。

遺物は、全体的には少なく図示出来たものは土師器瓶1、杯1、碗1である。遺構の全体に散在して見られいすれも床直で出土している。8の楕形態からは真間期後半の遺構と推察される。9はやや大型の碗、10は内面丹彩の皿に近い杯である。



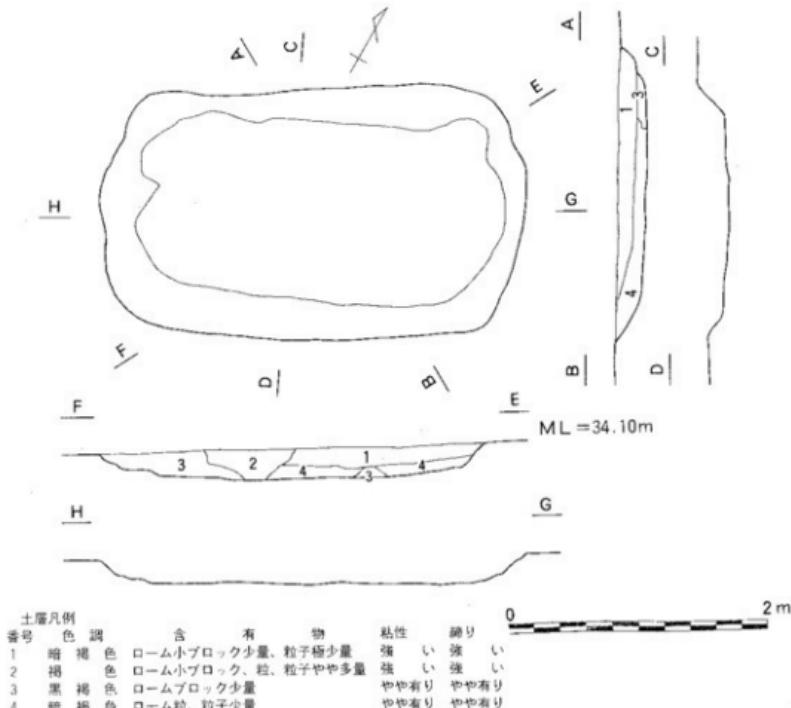
第4図 2号住居実測図

第3号住居跡〔第5図〕

本住居跡は、調査区の中央部西側に位置し切り合ひ関係なく単独で検出された。1号住居跡の西側3mの台地平坦部に占地していた。遺存状態は良い。主軸をN-63°-Eに置き東西3m、南北2m、廣部の丸みをもつ長方形プランを呈している。壁面はゆるやかに傾斜し、深さは25cm前後を測る。床面は中央部では縛まりをもち壁面、周辺部はやや弱い。柱穴は検出されず周辺部からも認められなかった。周囲も認められない。床面は若干の凹凸はあるがほぼ平坦に移行している。

竈は住居内には確認出来なかった。

覆土は、4層に分けられ2層が切り込み状に見られる。2を除き自然堆積状を示していた。1層暗褐色、2層褐色、3層黒褐色、4層暗褐色、各層ともロームブロック、粒、粒子を含む。全体的に締まり、粘性はやや強い。



第5図 3号住居実測図

遺物は総数20片でこれらは繩文土器、土師器少破片で図示出来る物はない出土遺物からは時期を特定する物はない。平安時代以降の遺構か…?。

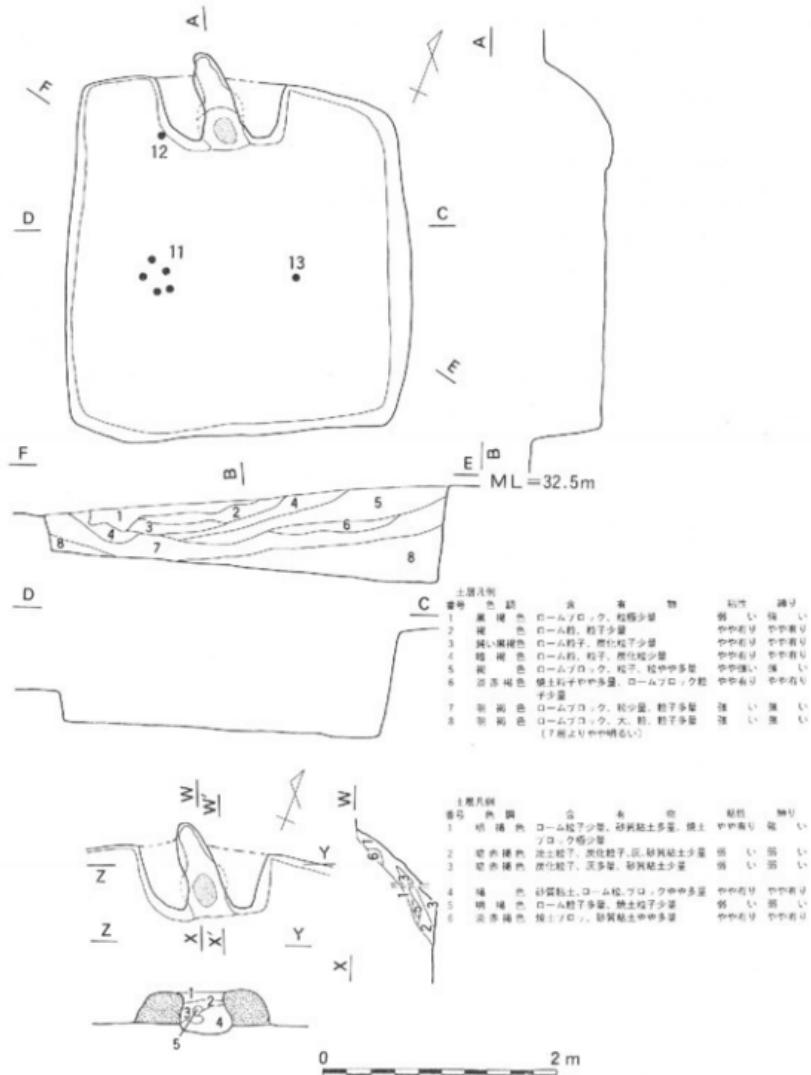
第4号住居跡〔第6図、第7図〕

本住居跡は、調査区の中央部西側の傾斜面に位置し切り合い関係ではなく単独で検出された。1号住居跡の西側20mに位置し台地は西に傾斜している。遺存状態は良い。主軸をN-30°-Wに置き東西2.9m、南北3.1m、隅部の丸みをもつ方形プランを呈している。壁面は僅かにだれ気味、深さは北側で60~70cm、西側では25cmを測る。床面は竈の全面では縛まりをもち檻面、周辺部は弱い。柱穴は検出されず周辺部からも認められなかった。周溝も認められない。床面はほぼ平坦に移行している。

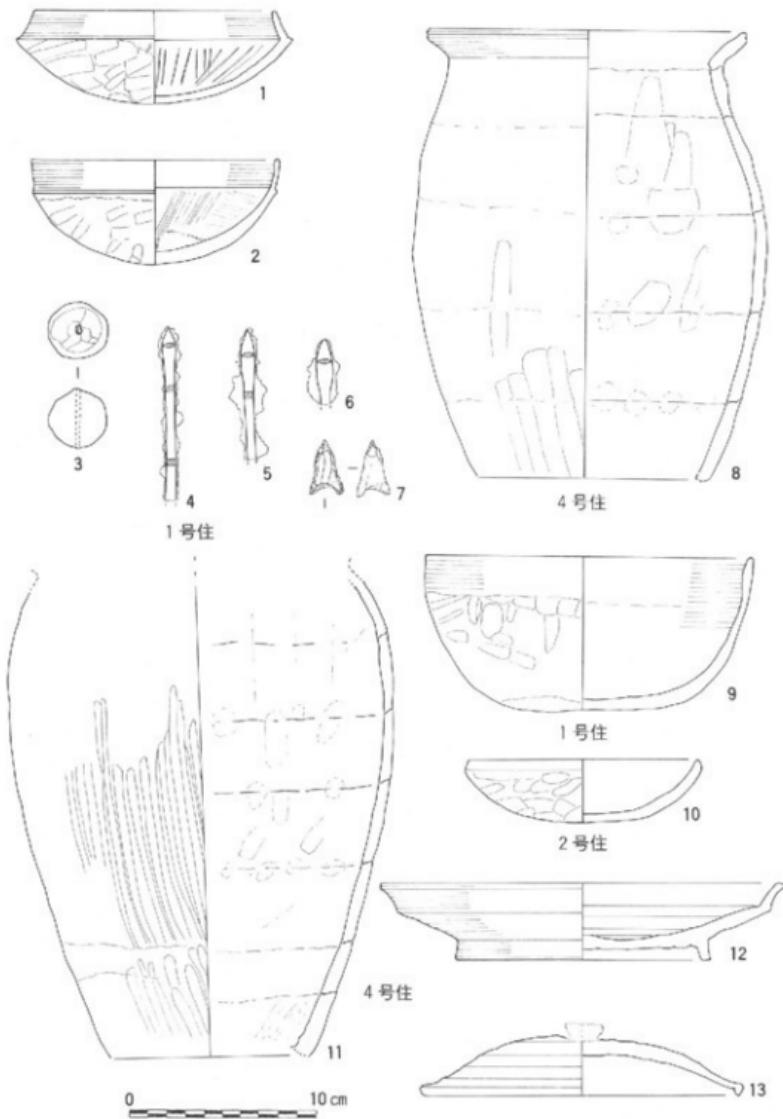
竈は、北壁中央部やや西寄りに位置し検出された。袖部は左右とも55cm前後で東側に向直線的に伸びていた。外部ではU字状に僅かに掘り込んでいる。火床部は前面部に位置し、煙道部の天井は欠失、用材は砂質のやや多い灰褐色の粘土を用いていた。本体の大部分は住居内に構築されていた。形態的にはV字状を呈する。

覆土は、8層に分けられ各層とも北側からの流れ込み状できれいなレンズ状の自然堆積を示している。1層黒褐色、2層褐色層と下部に向かってロームブロック、粒、粒子が多量に含み明るさを増し8層は明褐色。全体的に縛まり、粘性はやや強い。

遺物は、全体的には少なく図示出来たものは土師器壺から転用した瓶1、須恵器盤1、环蓋1である。遺構の全体に散在して見られいずれも床直上出している。12の盤は竈袖から出土している。転用された瓶からは真岡期後半から国分期の遺構と推察される。



第6図 4号住居跡、窓実測図



第7図 1.2.4号住居跡出土遺物実測図

遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	整形技法	胎土、色調、焼成	備考
1	杯	A 13	半球形底からゆるやかに内湾して立ち上がり	横ナデ、ナ	礫、砂	60%
	上部器	B 5	肩部に顯著な稜をもち縁部内傾しやや長め、口唇部は尖り気味。	デ、ヘラ削 り	暗い橙色	
		C 2			普通	床直
2	杯	A 13.2	半球形底部から内湾して立ち上がり肩部に弱い棱	横ナデ、ナ	礫少量、	70%
	上部器	B 5.6	をもつ、口縁部やや長めで外傾気味	デ、ヘラ削 り	暗褐色	
		C 2	器内は薄い。口唇部は収める。		普通	床直
3	土製	A 3.1	不規形状、粗雑な作り。孔部長方形状で両端部に	ナデ、押え	礫少量	完形
	丸玉	B 3.2	突部あり。		橙色	
		C			普通	+10
4	鉄鎌	A 9	茎部を欠失している。鎌身は細長い柳葉状で頭部			80%
		B 0.7	は断面長方形状。茎部を欠失。			
		C 0.2	鎌身部は扁平化。			+10
5	鉄鎌	A 7	茎部を欠失している。4同様鎌身は柳葉状形態、			50%
		B 0.8	やや長め。鎌身部は扁平化。頭部は茎部よりを欠失。			
		C 2.2				+10
6	鉄鎌	A 3.5	鎌身部のみで頭部茎を欠失、鎌身前述同様形態を			20%
		B 0.8	もつ。鎌身部はいずれも無間に近い形狀を呈して			
		C 0.2	いる。			+15
7	石鎌	A 2.9	チャート製の鎌ではほぼ完形、薄く扁平な作りでやや長い。片面のみややふくらみをもつ。本跡とは			完形
		B 1.8	時代的に差違がある。			
		C 0.2				+70
8	鉢	A 17	胴長で口徑、底径との差は少ない。頭部「く」の字状に外反、凹部をもつ。輪積痕を残し粗雑な調整。	ナデ、押え	礫、砂少量	90%
	土師器	B 24		、ヘラ削り	暗褐色	
		C 11.7			普通	床直
9	碗	A 17.5	平底に近い底部から弱く内湾して立ち上がり、口	横ナデ、ナ	礫、砂少量	90%
	土師器	B 8.2	縁部は直立気味、やや肥厚する。	デ、ヘラ削 り	暗褐色	
		C 7.5			良	床直
10	杯	A 13	皿に近い器形で浅い。口縁部は短く内傾気味で口	ナデ、ヘラ	礫、砂少量	完形
	上部器	B 3.4	唇部は尖る。内面は黒色。	削り	にぶい橙色	
		C 4			やや良	床直
11	甕	A	本来は甕として作られたものと思われるが頭部として使用されたと思われる。輪積痕を残し粗雑な調整、器肉は薄い。	ナデ、押え	礫やや少量	70%
	上部器	B		ヘラ削り	橙色	
		C 10.5			普通	床直
12	盤	A 21.6	竈左袖から出土したもので高台は短く直立し、口	回転台か? 左廻り	礫やや多量	80%
	須恵器	B 4	縁部は外反、器肉はやや厚め。ロクロ形態?。回転台?		青灰褐色	
		C 13.6			良	底袖
13	蓋	A 17	天井部のフタラミはややあり。把手は欠失で不明	回転台調整	礫やや多量	90%
	須恵器	B	で貼付。口唇部断面三角形状形態、かおりはわざ	か?	灰褐色	
		C	かに残す。回転台?		良	床直

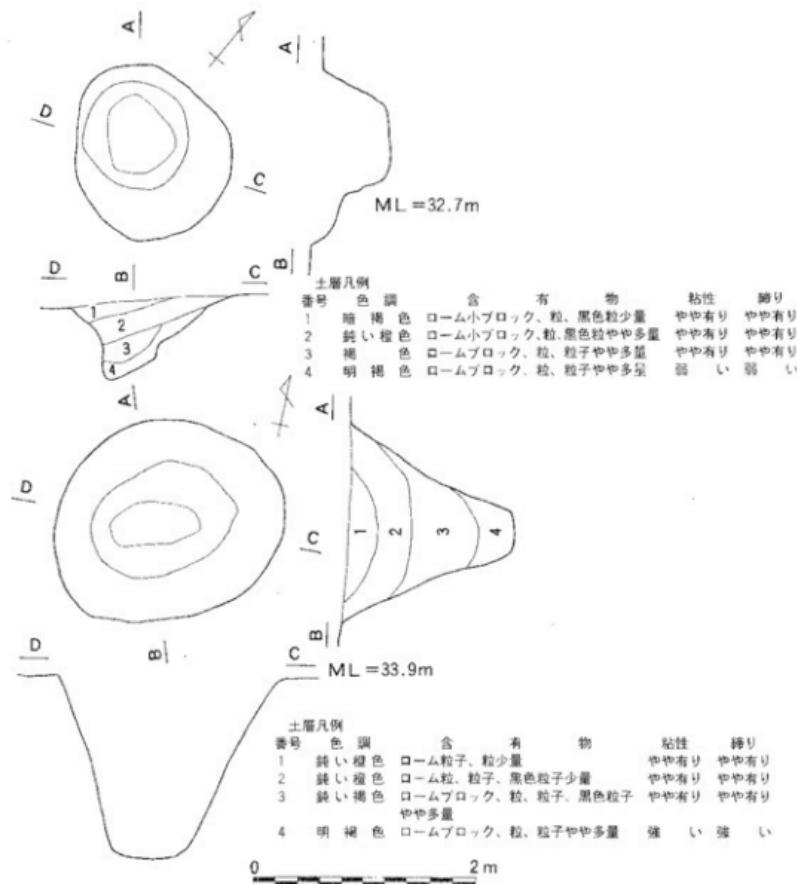
2 土 坑

本遺跡からは、7基の土坑が検出された。これらの土坑は、1号土坑を除き遺跡中央部に北から南にかけて見られ、一線上に左右交互して連続的に位置し認められた。形態的にも相似的であったが、遺物は少なく、いずれも縄文時代早期後半の纖維を多量に含む少破片のみであった。遺構の平面形態は円形、橢円形状を呈していた。

第1号土坑〔第8図、第12図〕

本遺構は、調査区の西南側のゆるやかな斜面部に位置し検出された。長径1.55m、短径1.4mの卵状形態を呈し西側に傾斜し最も深くなり70cmを測る。壁面はローム剥き出しで粘土などの張り付けはない。

覆土は、4層に分けられ傾斜側に向かって自然堆積と理解される層位を示す。1、2層は鈍い橙色、4層に向かって明るさを増し暗褐色、各層ともロームブロック、粒、粒子等を含み粘性、締まりはややある。



第8図 1・3号土坑実測図

遺物は、総数4片と河原石1点が出土し少ない。いずれも覆土中からである。図示出来るものは第12図1、2で胎土に纖維を多量に含み表裏にアナダラ属の貝殻条痕を不規則にもつ。深鉢形土器の胴部片と思われる。

遺物からは縄文時代早期後半の茅山式土器の遺構と理解される。

第2号土坑〔第9図、第12図〕

本遺構は、1号住居跡の南側に位置し調査区のはば中央部の平坦部に占地して検出された。長径2.3m、短径2.2mの楕円形状を呈する。深さは、2mを測り中央部に底面が位置し長円形形態。1m程度まではスリバチ状に傾斜し下部は垂直気味に掘り込む。掘り込み形態からは落とし穴状。

覆土は、6層に分けられレンズ状の自然埋積を示し1層はやや明るい褐色、下層に向かって明るさを増し各層ともロームブロック、粒、粒子を含む。6層は地山の白色の粘土を少量含む。粘性、縮まりはやや有り下層は強い。5層のみ弱い。

遺物は、総数20片とやや多い。いずれも覆土中からの出土である。第12図3～10で3は胎土に纖維を含まず横位の竹管による平行沈線を施し田戸下層式の深鉢形土器か、4～10は胎土に纖維を含み4は横位の平行沈線、6は格子状モチーフをもつ。7からは器表面裏にアナダラ属の条痕をもつ。

遺物から見ると最も多く見られた条痕文土器の時期、茅山式の時期が推定される。

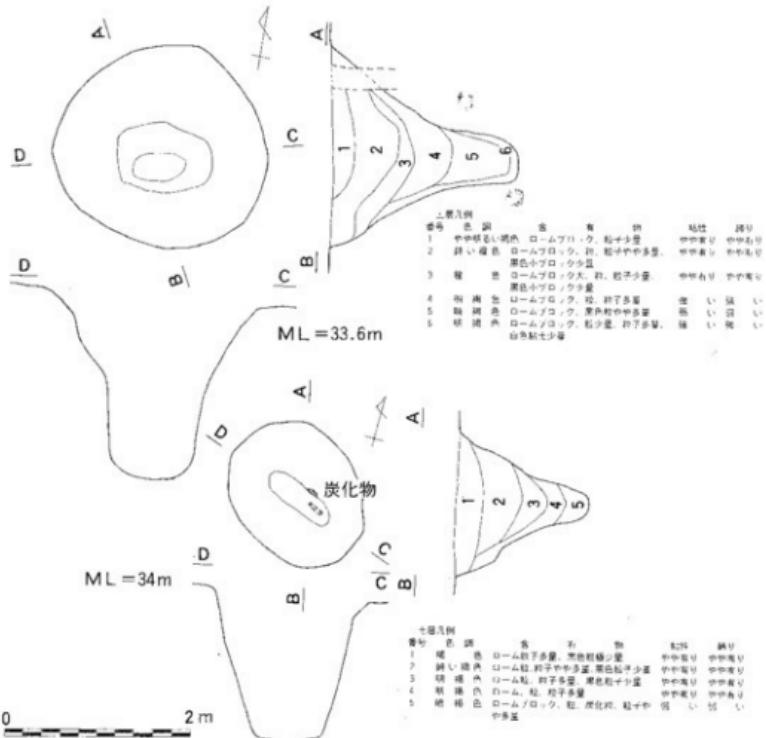
第3号土坑〔第8図、第12図〕

本遺構は、2号遺構の南側に位置しほぼ平坦地に占地し、検出された。長径2.1m、短径1.8mの楕円形状を呈する。深さは、1.5mを測り底面は中央部に位置し長円形、70cm程スリバチ状に掘り込み下部は鋭角で2号土坑に近い形態。掘り込み形態からは2号土坑同様落とし穴状。

覆土は、4層に分けられレンズ状の自然埋積を示し1層は暗褐色、下層に向かって明るさを増し各層ともロームブロック、粒、粒子を含む。4層は明褐色。粘性、縮まりは4層を除きやや有り4層は弱い。

遺物は、総数24片とやや多い。いずれも覆土中からの出土である。第12図11～21はいずれも胎土に纖維を多量に含む。11は沈線による木の葉状モチーフか。12は平行沈線、13、14、15は沈線のなかに細密沈線がみられるが少破片の為構成は不明。1、6、17、18は植物茎による有節沈線、19はアナダラ属の条痕をもつ深鉢形土器底部、20は単節の縄文をもつ11縁部で器肉は薄い。

遺物からの時期は鶴ヶ島式の範中に捉えられる。



第9図 2.4号土坑実測図

第4号土坑〔第9図、第12図〕

本遺構は、3号土坑の南側に位置し台地はゆるやかに南側に傾斜を示している。長径1.65m、短径1.3mのやや長円形を呈し、深さは1.4mを測り底面は中央部に位置し長円形状を呈する。70cm程スリバチ状に掘り込み下位は銳角的に落ちこむ。前述の2.3号土坑と同様な形態で落とし穴状形態。底面近くに炭化粒、物が2ヶ所見られた。

覆土は、5層に分けられレンズ状の自然埋積を示し1層褐色、4層までは下層に行くに従って明るさを増し最下層の5層は暗褐色を示す。各土坑の中では特異な層序を示す。各層ともロームブロック、

粒、粒子を含み粘性、縮まりは5層を除きやや有る。

遺物は、総数12片でやや少ない。いずれも覆土中からの出土である。第12図22～29で3号土坑同様の遺物構成をもつ。28は節の大きい羽状構成、23は格子状モチーフをもつ。

遺物からは3号土坑同様の時期と理解されよう。

第5号土坑〔第10図、第12図〕

本遺構は、4号土坑の南に位置し台地は東側にゆるやかに傾斜を示す。長径1.7m、短径1.5mの円形状を呈する。深さは、1.1mを測り底面部はやや北よりに位置し長円形形状態。3号土坑を一回り小さくしたような感じであり底面部までスリバチ状に落ちこむ。

覆土は、3層に分けられレンズ状の自然埋積を示し1層は鈍い褐色、2層も同様で黒色粒混入の差で3層は褐色、1層を除き粘性、縮まりは弱い。各層ともロームブロック、粒、粒子を含み、これらの含有量の差である。

遺物は総数5片と少なく図示したのは第12図30のみである。口縁部破片であるが無文、胎土に繊維は含まない。覆土中から出土している。

これらの遺物から時代は特定出来ないが、前述の遺構と同様の時期と思われる。

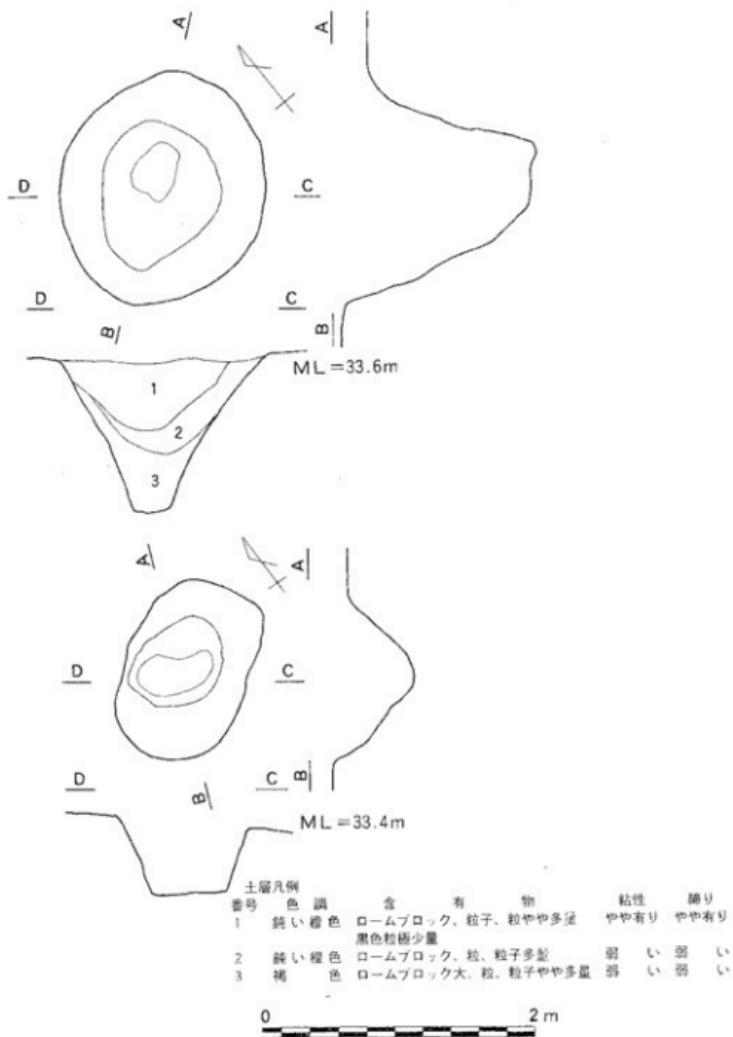
第6号土坑〔第10図、第12図〕

本遺構は、5号土坑の南側、東にゆるやかな傾斜をもつ斜面部に位置し検出された。長径1.35m、短径90cmの長円形形状態を呈し、深さは70cmを測る。壁面はローム剥き出しで粘土等の張り付けはない。底面部はほぼ中央部に位置し長円形。

覆土は、4層に分けられてレンズ状の自然埋積と理解される層序を示す。1層は鈍い橙色、4層に向かって明るさを増し明褐色、各層ともロームブロック、粒、粒子等を含み粘性、縮まりはややある。

遺物は、総数6片と河原石2点が出土し少なく、いずれも覆土中からである。図示出来るものは第12図31、32、33で33を除き胎土に繊維を多量に含み32は表裏にアナグラ属の貝殻条痕を不規則にもつ。深鉢形土器の胴部片と思われる。31は縄文のみ33は指頭による凹凸を2列もち浮島式土器と思われる。

遺物からは時期を推定することは危険と思われるが、縄文時代前期前半の遺構と推定される。



第10図 5, 6号土坑実測図

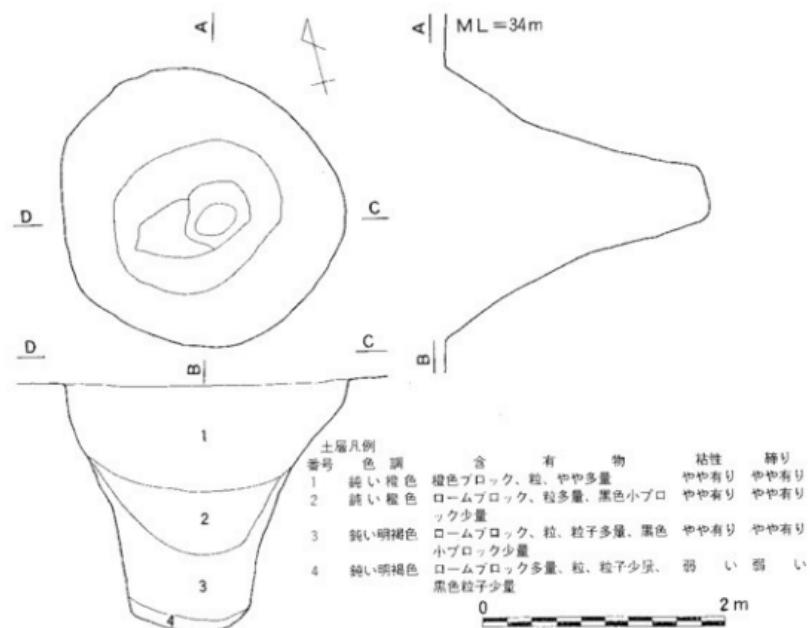
第7号土坑〔第11図、第12図〕

本遺構は、1号住居跡の西北側に位置し調査区の中央部西側の平坦部に占地して検出された。径2.3m程の円形状を呈する。深さは、2mを測り中央部に底面部が位置し円形形態。1m程まではスリバチ状に傾斜し下部は垂直気味に掘り込み中期の深鉢状。掘り込み形態からは落とし穴的。

覆土は、4層に分けられレンズ状の自然堆積を示し鈍い橙色、下層に向かって明るさを増し4層は鈍い明褐色、各層ともロームブロック、粒、粒子を含む。4層は黒色粒子を少量含む。粘性、締まりは4層を除きやや有り4層は弱い。

遺物は、总数10片と少ない。いずれも覆土中からの出土である。第12図34～36で34、35は胎上に大量の繊維を含み地文の織文のみで深鉢形土器か、36は器面表裏にアナダラ属の条痕をもつ。

遺物から見ると早期後半の時期が推定される。



第11図 7号土坑実測図



第12図 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7号土坑出土土器、建物跡出土銭

3 炉 穴

本遺構からは5基の炉穴が検出された。これらはいずれも西、南側にゆるやかな斜面部に位置し形態も円形、楕円形、長方形状と一様でない。火床部も1ヶ所のものと2ヶ所のもの等多様であった。以下その概要について述べる。

第1号炉穴〔第13図〕

本遺構は、4号住居跡の南側に位置し西側にゆるやかな傾斜面に占地していた。長径1.05m、短径1mの不整形な円形を呈し深さは、15cmと浅い。火床部は1ヶ所で楕円形状の形態である。

覆土は、3層で確認面1層は焼土ブロック、粒、粒子を多量に含む赤褐色層、2層も同様で1層同様炭化粒子を少量含む。3層は褐色で焼土粒を極少量含む。各層とも粘性は弱く、縮まりはやや有る。遺物は、1点も出土せず時期を特定するものはない。

第2号炉穴〔第13図〕

本遺構は、1号炉穴の南側に位置し西側にゆるやかに傾斜する面に占地していた。長軸1.6m、短軸90cmの不整形な長方形形状プランを呈し深さは、15cmと浅い。火床部は2ヶ所認められ、それぞれ円形、長円形形状態を呈している。

覆土は、4層に分けられ1層は赤褐色で3層まで焼土ブロック、粒、粒子、炭化粒子を含み粘性、縮まりは弱い。4層は、ロームブロック、粒子を多量、焼土粒を少量含み粘性、縮まりは弱い。

遺物は、1点も出土せず時期を特定することは困難である。

第3号炉穴〔第13図〕

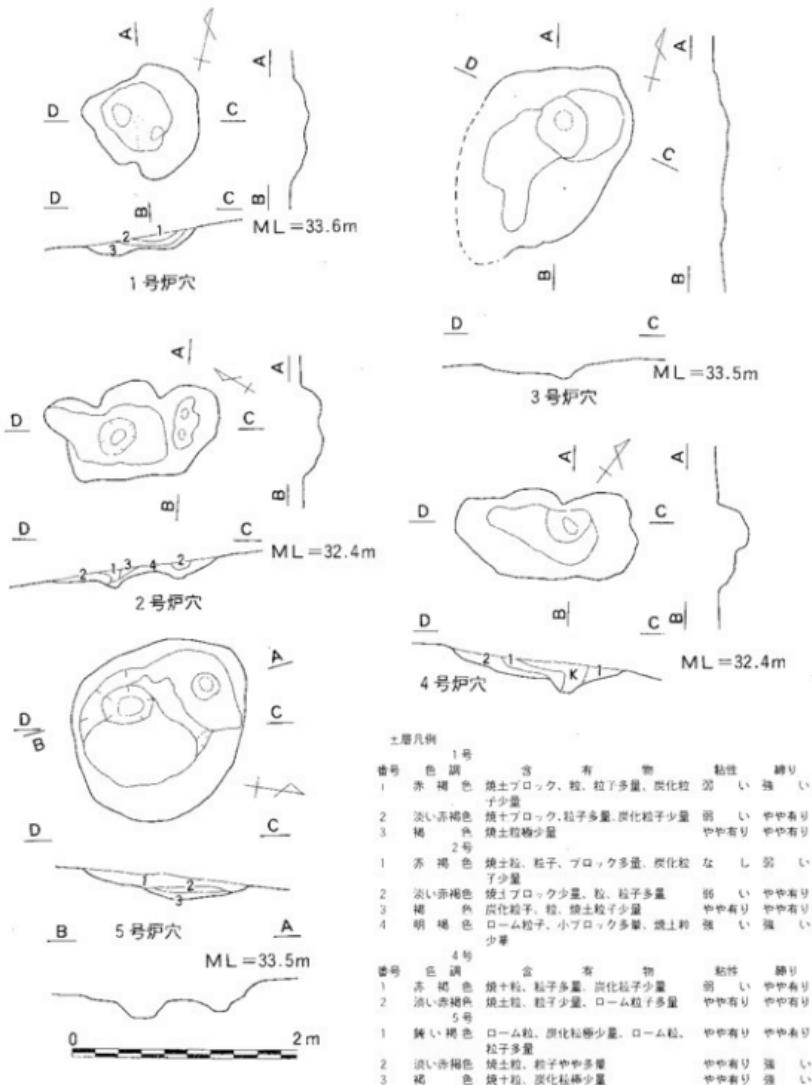
本遺構は、2号炉穴の北側に位置し南側にゆるやかに傾斜する面に占地していた。長径2.1m、短径1.3mの不整形な長円形プランを呈し深さは、15cmで火床部はやや北よりに位置し円形状を呈する。

覆土は、2層に分けられ1層は赤褐色で焼土粒、粒子を多量に、炭化粒子を少量含む。2層は、淡い赤褐色で1層同様、ローム粒子を多量に含む。粘性、縮まりはやや有る。

遺物は、3片程度胎土に纖維を多量に含む少破片が出土している。これらから時期は早期後半の遺構と思われる。

第4号炉穴〔第13図〕

本遺構は、3号遺構の東側に位置し南側にゆるやかに傾斜する面に占地していた。長軸1.65m、短軸0.8mの不整形な長方形形状を呈する。深さは、25cmで火床部は中央部やや北よりに位置し半円形状形態を呈する。



第13図 1.2.3.4.5号炉穴実測図

覆土は、2層に分けられ3号土坑同様の色調、縮まり、粘性である。
遺物は、2点のみでいずれも胎土に多量の纖維を含み、条痕を器面表裏にもつ。少破片の為図示しなかった。
遺物からは前述の遺構同様の時期が推定される。

第5号炉穴〔第13図〕

本遺構は、4号上坑の東側に位置し南側にゆるやかに傾斜を示す面に占地する。長径1.8m、短径1.5mを測り、火床部は西側に寄って2ヶ所認められそれぞれ円形状を呈する。深さは20cmを計測する。
覆土は、3層に分けられ1層は鈍い褐色で炭化粒子を少量含む。2層は淡い赤褐色、焼土粒、粒子をやや多量に含む。3層は焼土粒、炭化粒を極少量含む。各層とも粘性はややあり、縮まりは強い。
遺物は、3片出土した。いずれも胎土に纖維を含むもので縄文を施文している。時期は前述の土坑同様の時代が推定される。

4 建物遺構〔第14図、第15図〕

本遺構は、調査区の北側に位置し長辺の東西22m、短辺の南北17mを計測する長方形の土手が南側の一部を除き巡る。南側の東側部分は当初から存在しない。土手の高さは、西側で60cm、北側は80cmを計測し、西側は外に直線状に南北に走り調査区北側の山林中に位置する土手囲いに連続する。土手の間は通路として利用されかなり良好な縮まりが認められた。

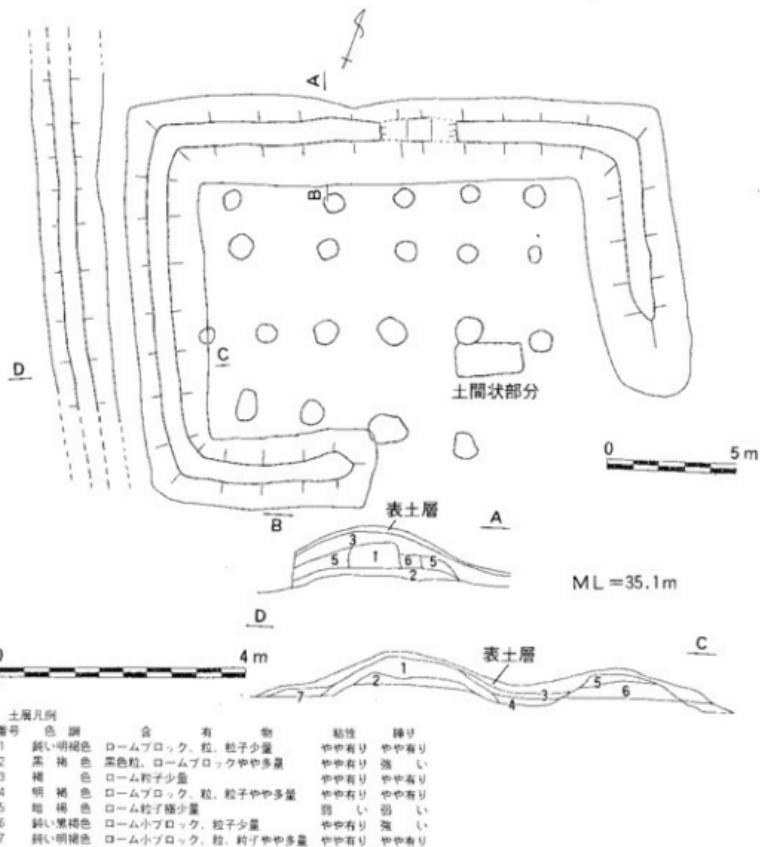
土手は、いわゆる中世の城郭または館のものとは一目で差違がみられ屋形の可能性は無く、周辺にその痕跡、掘、腰テラス等は見られない。台地下からの通路状の凹地が連続し続いていることからこれが、通路とし利用されていたと思われる。台地下の部分には伝承として寺跡？寺小屋として利用された建物が存在したと言われているが明確ではない。

土手は単純な積み重ねで6層に分けられ、構築していたが縮まりは弱い。これらからも館の可能性はない。

建物遺構は上台石は検出出来ず断定はできないが基礎部分にあたるロームの固く突き固めた跡が見られ特に2号住居跡の中の部分はローム土を入れ入念に固められていた。これらから割り出される建物は第15図に示すように東西4間、南北3間の建物が想定される。奥の北側は6尺、1間、次に9尺で1間半が二間南北には東から6尺が三間で西側のみ12尺で所謂2間であり、この東側は通し間状で18尺三間である。

これらの間からは江戸時代の建物の寸法と思われるが地元に、この建物についての伝承、話はない。間の割り付けから単純な民家とは思われずまた寺等の建物は想定できない。

地元では閑居山とも言われ小幡地区の住職の隠居寺？、隠居所？〔要村史〕また台地下に存在した



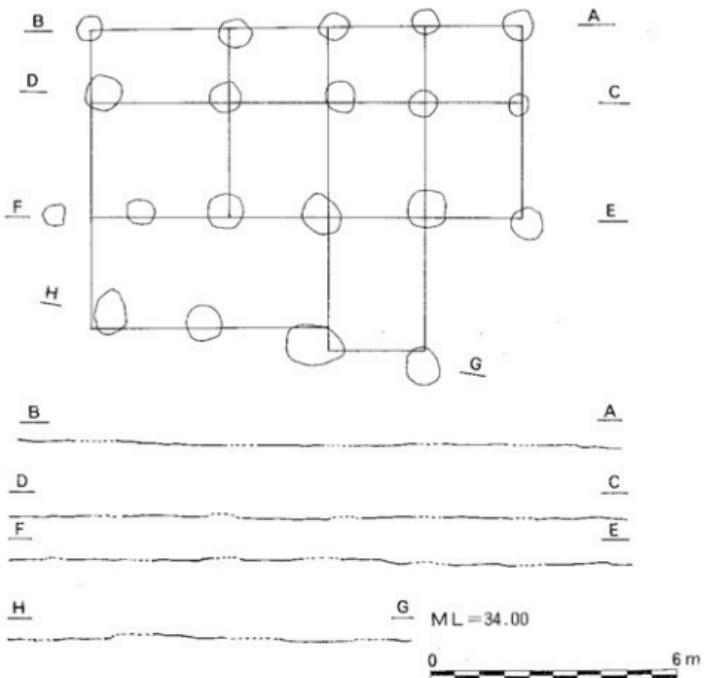
第14図 建物遺構と土層図

智善院住職の住まい？ 等の説が（地元の塙 正光談）等があるが不明であることが史実との話であった。

間の割型から言えば単純な民家では無く、また武家の家とも考えがたく寺に近い建物と思われる。それは奥の2間の9尺間が本尊様を安置するような間に見えるからで断定はできない。

建物は、柱間寸法から近世の建物でありそれも後半の時期が推定され、遺構中央やや北よりから寛永通宝1枚が出土している。その他、陶器、磁器、かわらけの出土は1片もなく僅かに南東の隅から土間状の固く踏み締められた跡が検出されたに過ぎない。

調査の結果からは建物の性格を特定出来る遺物等は検出出来なかった。これは調査区の西側の土手開いの部分の調査をまたなければ相対的に断定することは危険である。



第15図 建物遺構実測図

5 グリット出土土器〔第16図〕

本遺跡の遺構確認中出土した土器を一括する。上器は総数160片で縄文式土器124片、弥生式土器5片、土師器31片、その他河原石が10点程認められた。いずれも細片であったが弥生式土器はすべて図示した。以下縄文式土器、弥生式土器について述べる。

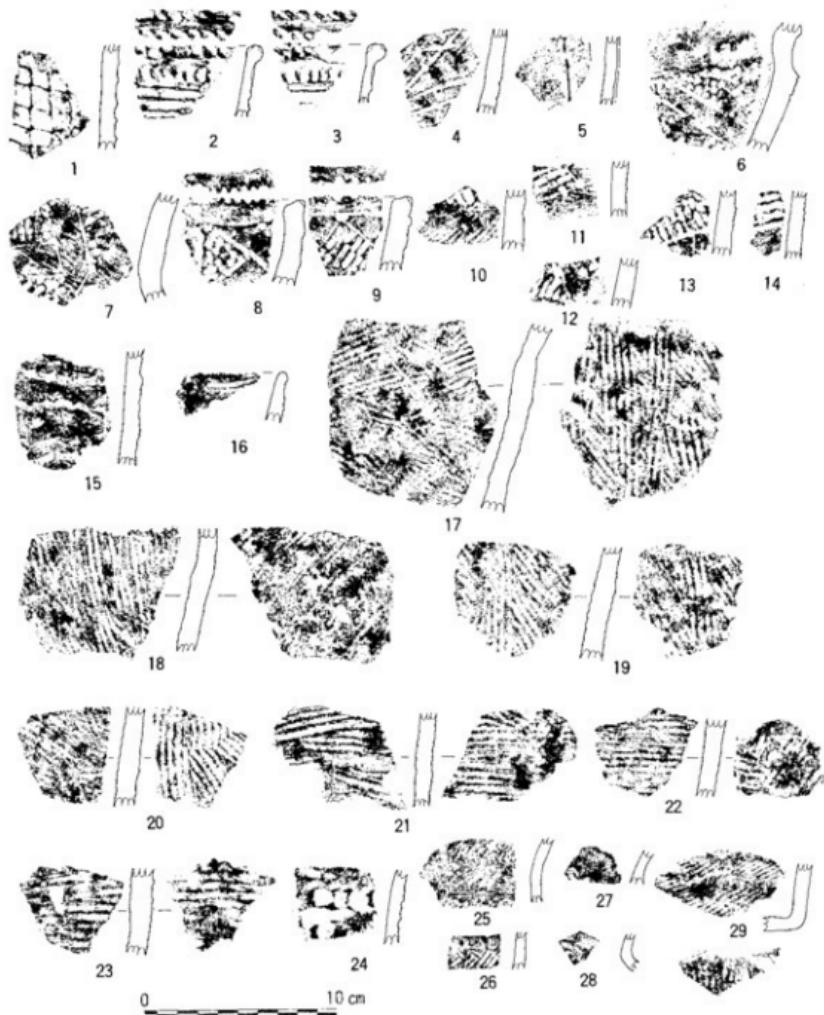
縄文式土器は、早期の条痕文系土器が大多数を占め、前期の土器は1片、他は見られない。1は、格子状のモチーフをもつ、2、3は口唇部が肥厚し刻み目を施す、4は平行沈線をもつ。5は散落起線をもつ、6～14は胴部に括れをもち沈線区画の磨消部をもち他は棒状工具による指突、沈線を施す。沈線の交点に指突をもち胎土に纖維を少量含む。15、16は植物状のもので有節沈線文をもつ。17～23は胎土に多量の纖維を含み器面の表裏に貝殻条痕をもつ。

24は2段の押庄を加え胎土に纖維は含まない。前期後半の土器である。

25～29は弥生式土器でいずれも細片で器形を窺うことは出来ない。29を除き頸部で磨消と縄文が見られ器肉は薄い。いずれも在地系の土器である。長岡式土器か。

1. 5は野鳥式か、2. 3は不明。4は田戸下層式、6～14は鵜ガ島台式、15. 16もその範疇か、17～23は茅山式土器。

24は前期の浮鳥式土器で1片のみであった。



第16図 G出土縄文、弥生式土器

V. 総括

本遺跡は、今日まで遺跡としては登録されていない地区からの発見であり開発行為に関しての埋蔵文化財行政の対応が重大な結果をもたらすことになる。そうゆう意味では今回は良い方向で処理された事例であろう。担当者の適切な対応と能力が問われる。

この新しく発見された菖蒲沢遺跡からは、縄文時代の落とし穴状土坑、炉穴と古墳時代後半から奈良、平安時代にかけての住居跡が検出された。また僅か5片であるが弥生式土器が認められた。また性格不明の建物跡が検出された。以下これらの特徴を述べ結びにかえたい。

縄文時代の落とし穴状土坑の掘り込み形態は、堀鉢状で下部は垂直に近いもので他の遺跡検出の形態と若干の差違をもつ。配置状態から推定してほぼ間違のないものである。穴周辺に導入、追い込みの櫛を設けて配置したと推定される。出土した土器から茅山式の時期が推定される。

炉穴は、前述の十坑の時期に相応すると理解したい。遺物の少ない中で時期を特定することは危険であるがその配置がすべて台地縁辺の斜面部に点々と散在して占地していることから同一の時期と推察すべきと思われる。山仕事の焚火の跡とは完全に差違が見られる。

住居跡は、それぞれ遺物に特徴があり1号住居跡は鉄鑓を出土し、环形土器は肩部に顯著な棱をもち口縫部はやや長め、体部は半球形状形態で、これは古墳時代後半の鬼高式中葉の時期が特定できる。

2号住居跡は、口縫部の特徴ある胴長の櫃、碗状の土器、皿に近い杯等の特徴から真間期後半の時期、奈良時代が推定される。

4号住居跡は、出土した変形土器の胴長の器形、粗い範調整、須恵器の付け高台の形態、蓋のカエリ等から国分期の遺構と推定される。

これら3軒の住居はほぼ東西に並んで検出されている。

3号住居跡は、遺物が少ない時期、時代を特定することは困難であり4号住居跡の時期から鎌倉時代前後が考えられるが特定は出来ない。

住居跡の数は少ないが1号から4号住居跡まで、ほぼ連続して営まれていたと理解してよいと考えられる。さらに北側の台地接続部にわたって住居は営まれていたと推定され遺跡の範囲は広がりをもつであろう。そして、土手固いの建物遺構の性格もこれらの調査結果が結論をだしてくれると確信する。

最後に調査にあたり御協力をいただいた関係各位に対し心からの感謝の意を表し結びにかえる次第である。

菖蒲沢遺跡発掘調査会組織

公長	北浦村教育委員会教育長	阿須間俊夫
副会長	北浦村文化財保護審議会長	石上積亮
理事	塙本建設株式会社	塙本フミ
"	主任調査員	汀安衛
"	調査員補助	宮内勝也
"	北浦村教育次長	有馬久
監事	北浦村出納室長	金田幸男
"	塙本建設株式会社	鈴木征公
幹事	社会教育係長	人見偉策
"	社会教育主事	栗山祐一
"	主事	森坂政行
指導機関	茨城県文化課	
"	鹿行教育事務所	

菖蒲沢遺跡発掘調査作業従事者

調査主任	汀 安衛	作業員	藤崎利男
調査員	宮内勝也	"	小室喜久枝
補助調査員	人見偉策	"	根本美枝
"	栗山祐一	"	岡崎たつ
"	森坂政行	"	堀君江
作業員	齊藤行重	"	堀芳子
"	青木清二	"	堀青造
"	今泉清衛		

図版 1

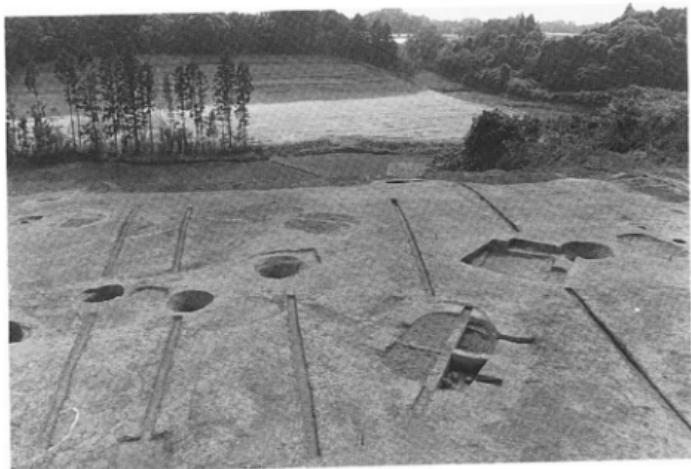


遺構遠景



遺構確認とプラン

図版 2



調査区南側遺構検出状態



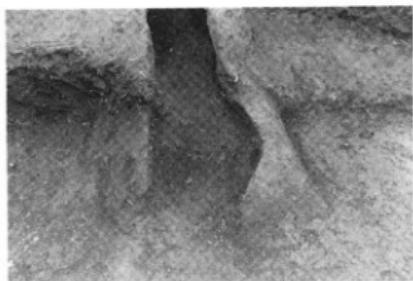
建物跡と 2 号住居跡



1号住遺物出土状態



同 遺物出土状態



同 電

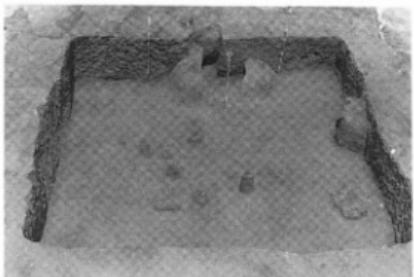


同 完掘

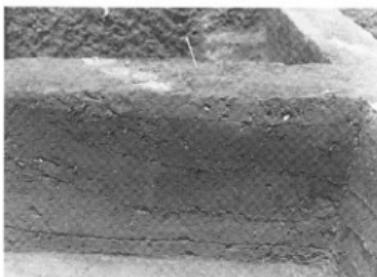


同 遺物出土状態

図版 4



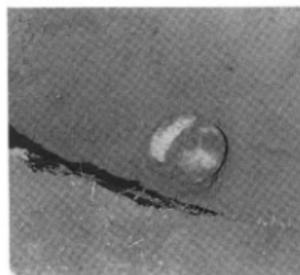
2号住遺物出土状態



同 土層、上部はジギョウ跡



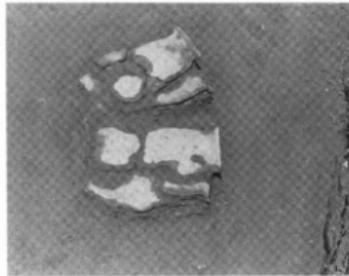
同 3



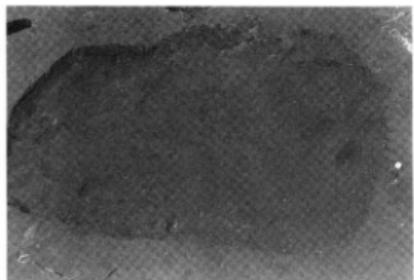
同 遺物出土状態



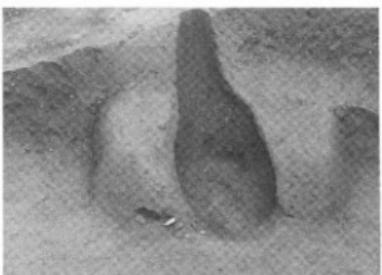
同 完掘



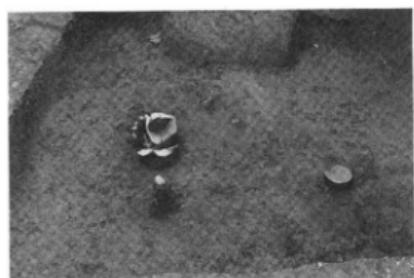
同 遺物出土状態



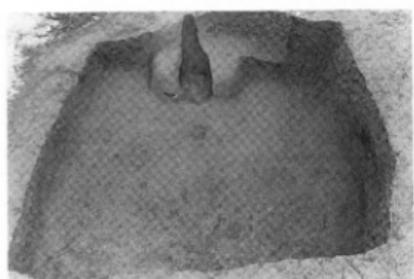
3号住完掘



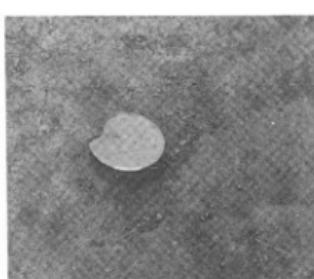
同 瓷



4号住遺物出土状態

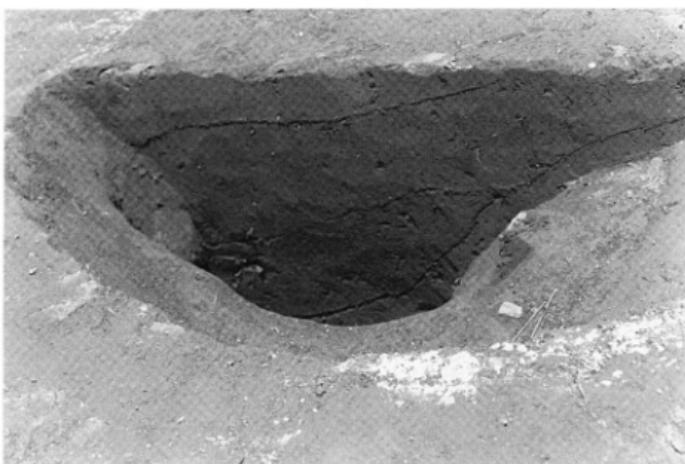


同 完掘

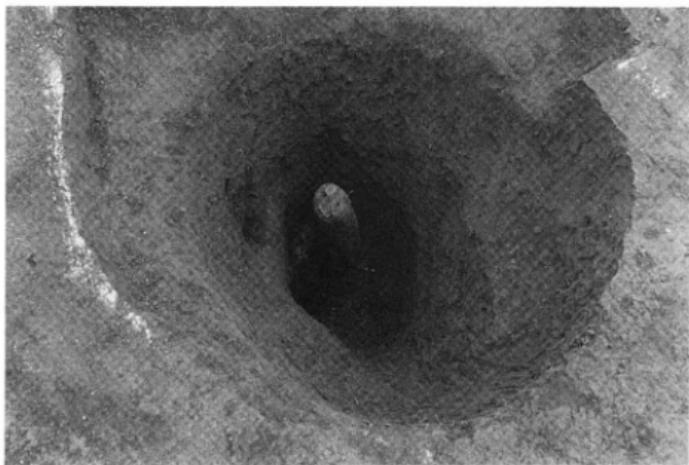


同 遺物出土状態

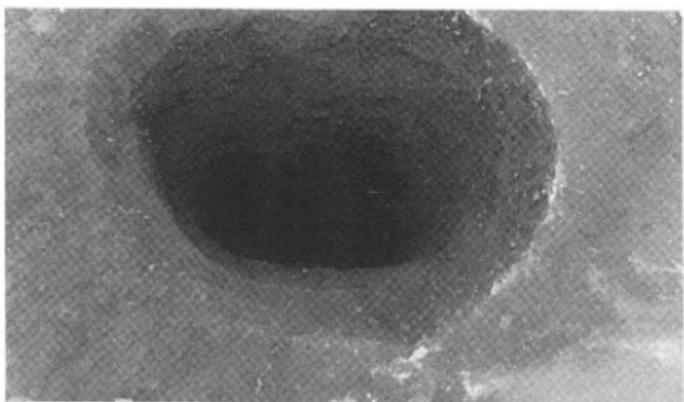
図版 6



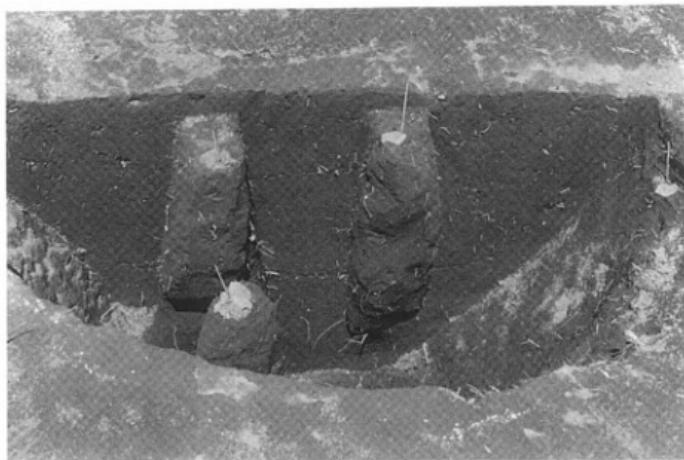
1号土坑土層



2号土坑遺物出土状態

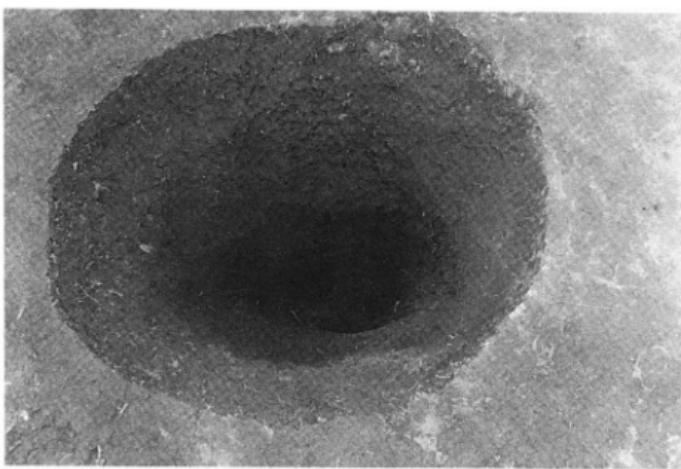


3号土坑完掘



同 土層と遺物

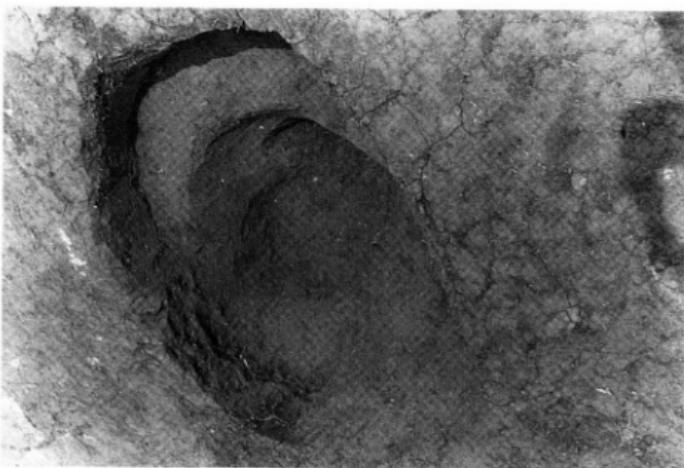
圖版 8



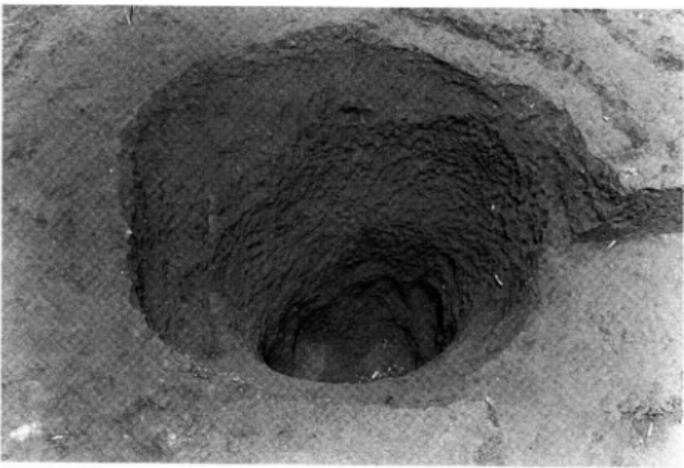
4 号土坑完掘



5 号土坑完掘

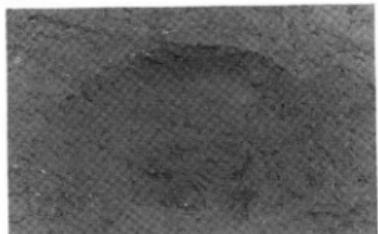


6号土坑完掘



7号土坑完掘

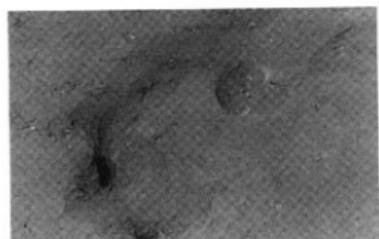
図版10



1号炉穴完掘



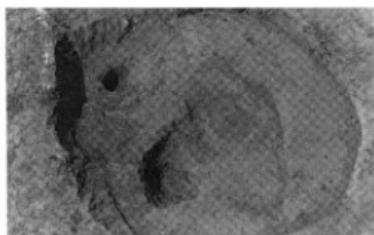
5号炉穴完掘



2号炉穴完掘



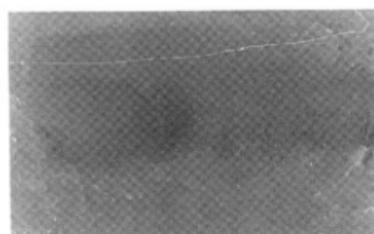
建物遺構土手回い



3号炉穴完掘



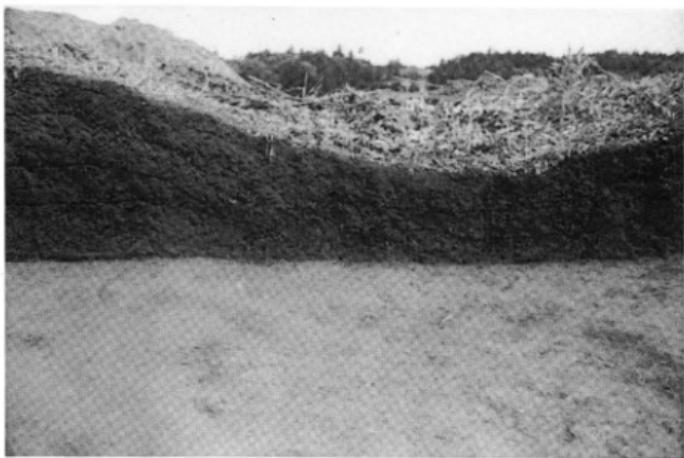
同 南側から



4号炉穴完掘



同 北側土手土層



同 通路跡

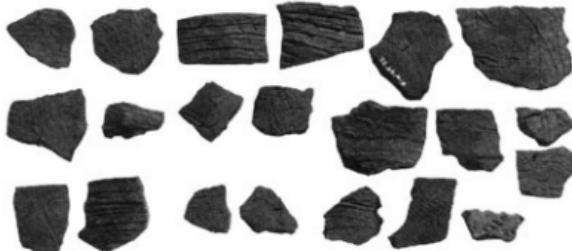
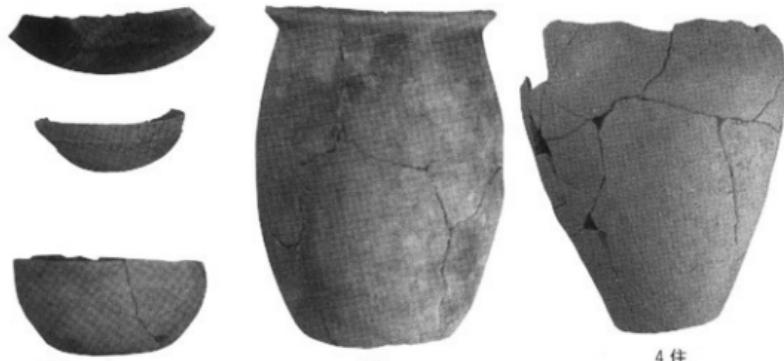
図版12



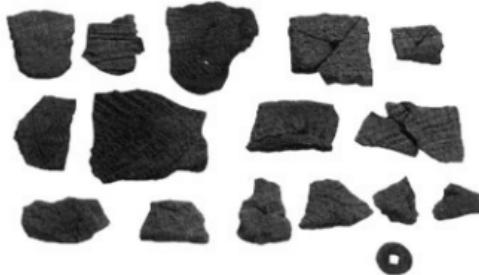
建物遺構と2号住居跡



建物遺構と2号住居跡



1～7号土坑
出土遺物と
寛永通宝



茨城県行方郡北浦村
菖蒲沢遺跡調査報告書

編集発行 菖蒲沢遺跡調査会

発行日 1991年11月

印刷所 株式会社 さんゆう社印刷
行方郡玉造町甲2641
